1989年３月１日発行　（財）高知市文化振興事業団

文化高知 28

生涯学習社会づくり

吉村雄治

臨時教育審議会の答申をうけて、まず着手したのが文部省の機構改革で、社会教育局が生涯学習局と衣替えをし、しかも筆頭局に位置付けられた。

私もだんだんと年を重ねてくると、最近ふと、仕事から一切解放されたら、どうやって日常生活を楽しく、生きがいのあるものにすることができるだろうかと考え、不安になることがある。そこで問題となるのが、いかに楽しく参加できる生涯学習社会を構築して行くかである。

これだけ国際化、情報化、高齢化が進行する現状で、高知県のように学力や非行が云々されるのは、根本的に、幼児期における家庭教育が主要な問題部分を占めているように思う。学校教育と、しつけ中心の家庭教育が一体となってこそ、教育本来の実は挙がり、人間形成の基本を身につけることができると思う。その意味から、家庭と学校を結ぶＰＴＡ組織や、積極的な協力を惜しまない社会の温かい理解も必要となってくる。また、社会に巣立ってからは、仕事を通じての人とのかかわりあいは勿論、趣味のグループ、サークル活動、それに社会奉仕活動等人間性の涵養に有益な修練を心掛ける意欲が大切だが、これとても学校教育が土台となることを忘れてはなるまい。

数年前中国を訪問した際、いわゆる定年退職後の方々が、道路の清掃や子供の登校時の横断指導など、グループ活動に嬉々として従事しているのに直面し、心を打たれた記憶がある。教育においても、その国際化が取り上げられ、二十一世紀に向けた教育目標として「世界の中の日本人」をあげている。

「想」川崎太一

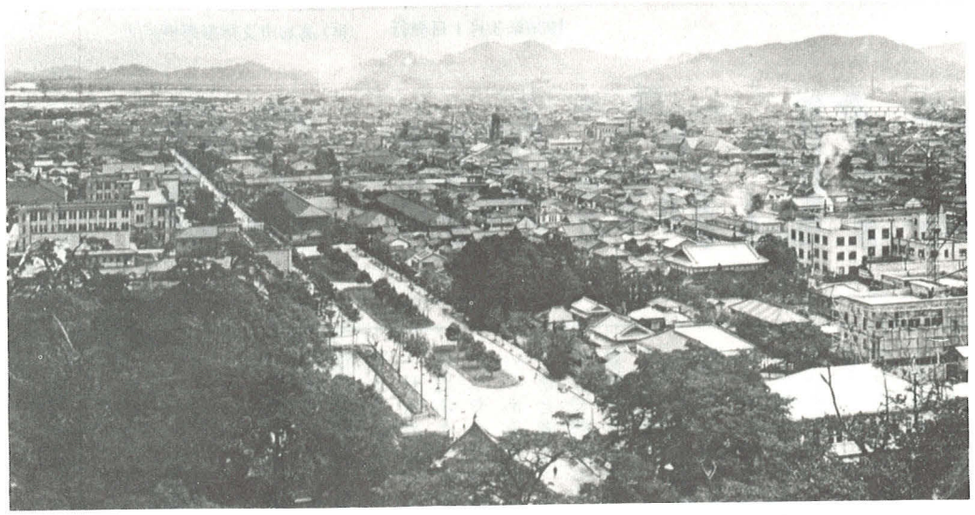
先にも述べたように、無垢な幼児期に親子による触れ合いの機会を多くし、豊かさと幸せに満ち足りた我が国と、発展途上国の子供達の生活などを教えることによって豊かな情操をはぐくむ事も可能となり、国際人への近道だと思う。私はそのような趣旨の祝辞を結婚式などで、これから新しくスタートし、やがて子育てを迎えるであろう人達への餞（はなむけ）として送ることにしている。

私はユネスコ運動のお世話もさせていただいているが、教育、科学、文化のバランスのとれることが、とりも直さず文化都市高知の構築につながると思うし、生涯学習社会の原点はそこにあると思う。むつかしい事を考えずに、自らが参加することに意義があるし、また行政も、県を始め市町村挙げて、機会や場所の提供等々理解を示す必要があると思う。

しかしながら、やはり自分達の手で学び、生きがいに満ちた生活を送れることが何よりも大切な事であることを認識し、一日も早く理想的な生涯学習社会の実現に期待するものである。

（県教育委員長）

高知市創世のころ

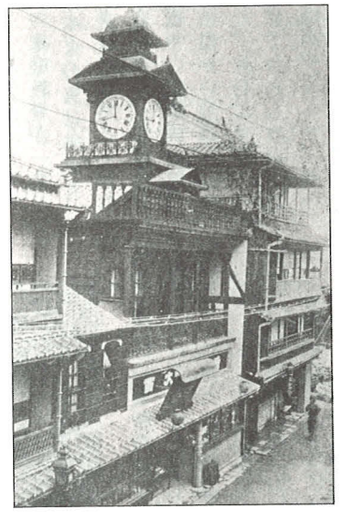


明治38年頃の高橋自転車商会
下、明治30年代の大西時計貴金属楽器商
左、年代不詳、高知城より見た市街

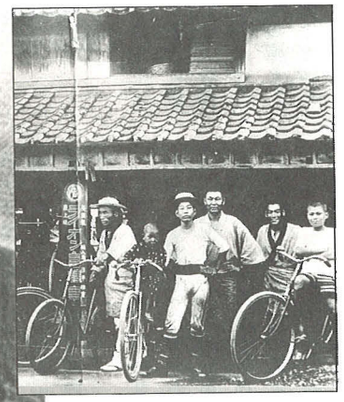
高知城を中心とする周辺は、藩政時代は「廓中」と呼ばれて、武士の住居地区であったが、明治４年の廃城とともに市民雑居となり、上町や下町と同格になった。地方制度の整備がすすめられるなかで、明治11年（1878）12月以来、土佐郡長の管轄下におかれた高知街17カ町、北街13カ町、南街13カ町、上街６カ町は、明治22年（1889）４月１日、全国31市とともに市となった。当時は人口２万7千あまりの小さい市であり、市にするか町にするかで賛否両論あった中の誕生だった。

市長以下三役全員と市会議員30人は、全員民権派で占めた。〝自由は土佐の山間より〟といわれるように、まさに自由民権の誇りを高々と掲げた発足だった。

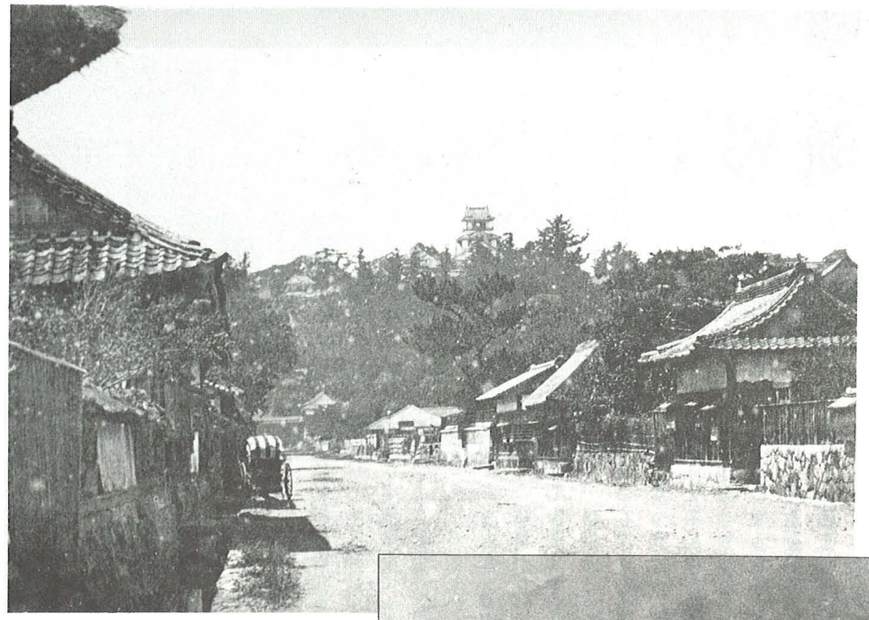
当時の街の様子を、古い写真でひろってみた。



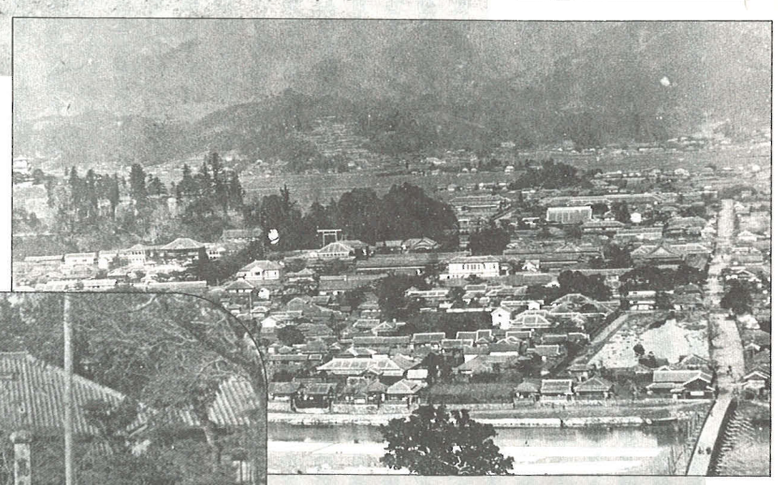
明治13～14年頃の本町通りの日曜市

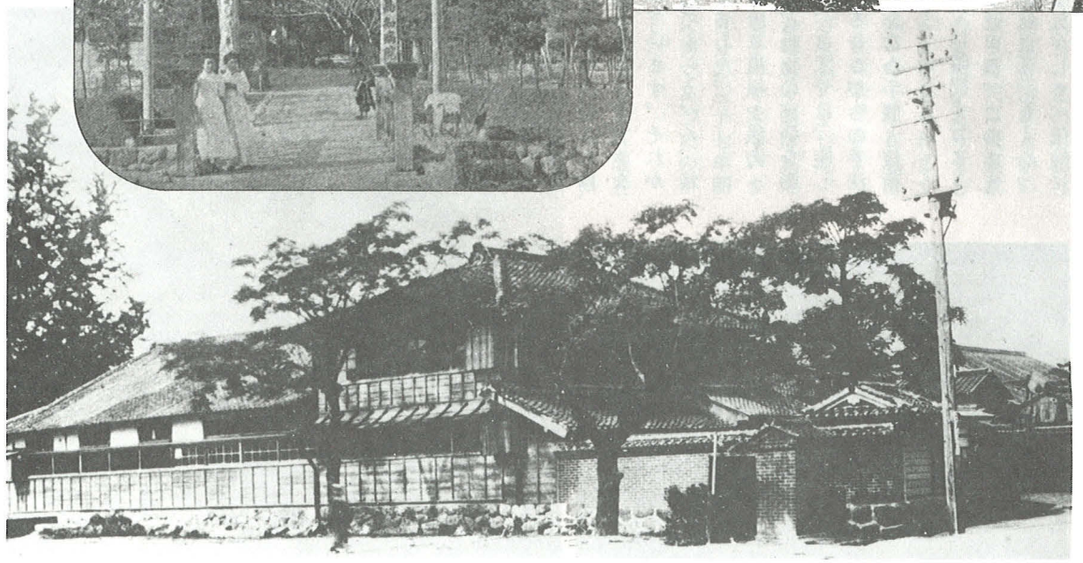


掲載しております写真は、高知市民図書館のご協力を頂きました。



上、明治６～７年頃の追手筋
右、明治末期、筆山から見た高知市
下、明治20年頃、町田旦竜の経営する高知病院





明治25年、帯屋町の勧工場跡に建てられた最初の高知市庁舎

猟銃彫刻にかける

高橋　享

猟銃の価値は、それに施されている彫刻によって決まると言われます。銃のレシーバーや引き金、フレーム等銃身のもとが入るところ、また部品や細かいネジの金属部分に彫刻を施す、それが私の取り組んでいる猟銃彫刻です。

私が高知工業を卒業してミロク製作所に入社した昭和二十六年は、GHQ統制解除の年で、翌二十七年は戦後はじめて猟銃・単発銃の生産に乗り出した時期でした。

「おまん、工業を出たかよ。これをやりや、おいしいおまんまが食べれるぜよ」入社一日目の会長（当時社長）の言葉でした。以来今日まで猟銃彫刻の道を歩むことになるわけですが、この人こそ私が師と仰ぐ弥勒武吉さんであります。

戦後まもなくの頃で、彫金の技術も途絶えていて修業も大変でしたが、会長から布目象眼や肉盛象眼の手法も習得いたしました。

六、七年程経ったある日、大勢の見学者に囲まれ、彫刻に関心を持たれたお客さん達から大変なお誉めに預かったことがあります。翌日会長に呼ばれて、「昨日は大変誉められてニコニコしていたが、あれは誉めているのか、くさしているのか分からんぜよ」と言われ、これにはこたえました。会長は、その時の私の顔に慢心を認めたのでしょう。これは、私にとって生涯忘れることのできない尊い戒めとなっています。それから私は会長に誉めてもらうべく、精進を重ねてまいりました。

普通、猟銃には唐草模様や猟犬・カモ・ハト・猪など動物の図柄を彫り込みます。当時、日本では、座して平たがねを用いる昔ながらの手法がとられており、非常な手間と技術が必要でした。

〝従来の手彫りでは時間やコストがあまりにかかり過ぎる、このままでは彫刻付きの猟銃自体がなくなってしまう〟そんな気がして、伝統に培われかつ合理的なヨーロッパの技術を導入しました。

まず、彫り方を日本流から西洋流に変えました。洋彫りは立ったままで何種類ものたがねを使って彫ります。たとえば、V型の溝もV型のたがねを使えば一度で彫ることができ、細い線も一度で何本も彫れるたがねがあるのです。

道具だけでなく、より高度な技術を習得するために、ベルギーのFN社の技師ムッシュ・ロバンさんを三カ月招聘して技術指導を受けたり、イタリアの彫刻学校へ若手技能者を派遣したりして、彫金技術の先進国ヨーロッパ各国の技能を学びました。

イタリアのジョバネリさんより習得したローラー技法は、最初粘土のように柔らかく熱処理を施せばたがね以上に堅くなるという特殊素材を使って、圧力をかけて写しとるもので、その出来映えは、専門家でないと手彫りかどうか判断できないほどの仕上がりです。

また、薬品を使い金属を溶かすエッチングを改良して彫刻へ応用したり、金・銀・銅などを図柄の繊細な局部までメッキする方法（ブレーチング）を考えたり、少しでも安く量産できるように努力を続けています。

最近、知人に頼まれて、龍・虎、五重塔の彫刻をしました。やっぱり手彫りには機械にないよさがあります。しかし、何度彫っても仕上がると、「ああ、もっとこうすればよかった」と思うことばかりで、自分自身が満足できるものはなかなかできません。

昨年十一月、労働大臣表彰という身に余る栄を受けることができ、家内と二人で上京しました。当日、私の右隣りに同じ金属彫刻の後藤正道さんがいました。「彫金で江戸時代に後藤家といって代々名工の家柄がありましたが、その流れをくんでおられますか」と尋ねると、「いや、私どもは自分で叩き上げてここまでできました」と言われたので感心しました。

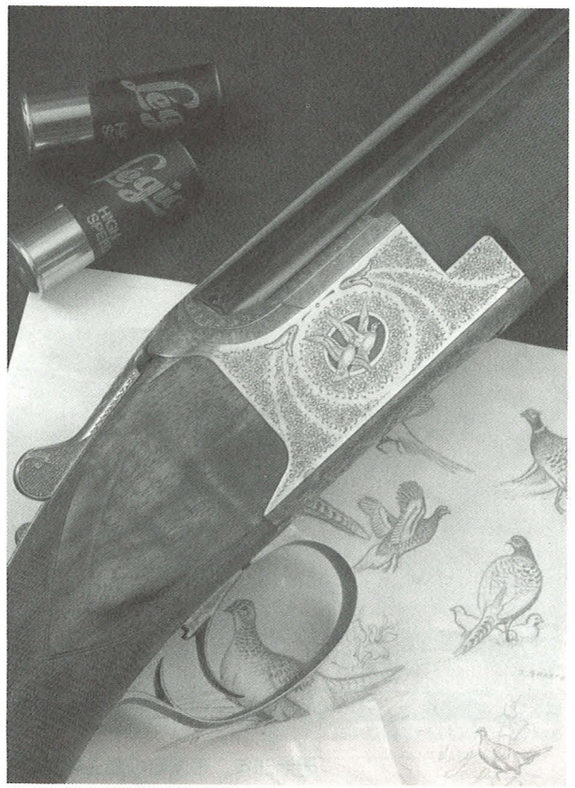
会場には、全国から各々選ばれた人達が夫婦連れで集まってきていました。その中で、自分の三十七年間を振り返り、同時に何であったのかと自問したことでした。

一口に猟銃彫刻と言っても各国各様の特徴があって非常に面白く、西独の「メルケル」という銃は唐草が頑固なまでにきっちりと彫られているし、英国の「チャーチル」には英国紳士のような柔らかいムードの気品ある唐草があり、イタリアの「ベレッタ」には繊細な一ミリに十本も入ったような線彫り仕上げの拡大鏡仕上げのものもあります。

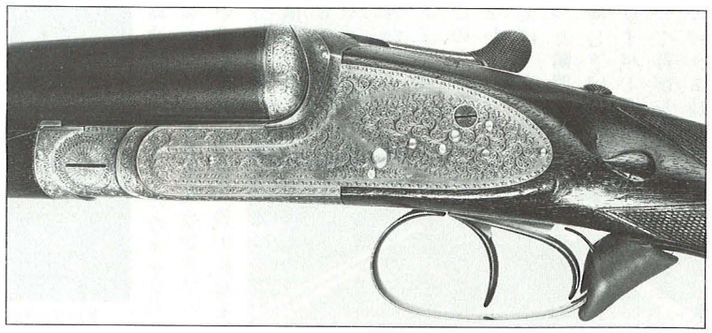
日本の絵画や彫刻には筆文字の肉太の感覚がありますが、ヨーロッパにはペン画、ペン軸仕上げの風潮があるのも面白い。フランスのルーブル美術館やイタリアミラノの街等、ヨーロッパには街全体が美の街、芸術の街の観がありますが、日本では、古い建物や神社仏閣にしかそれらしい面影がないのは如何にしても見劣りがします。豊かな感覚を養うためには公園や美術館、建物等、子どもの時から美に慣れ親しむ、言い換えれば心の琴線をひかれるような雰囲気をあらゆる場所に作っていくことが必要ではないかと思っております。

最後に、私も〝仕事に限りなし〟をモットーに、彫刻した絵から、芸術性があふれるような作品をこれからも作って行きたいと思っています。

（彫金家）

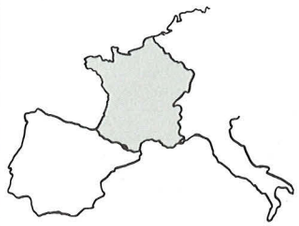


銀　象　眼



英国調極浅彫り彫刻

フランス1周 1万キロ



1 走る

小笠原 真一

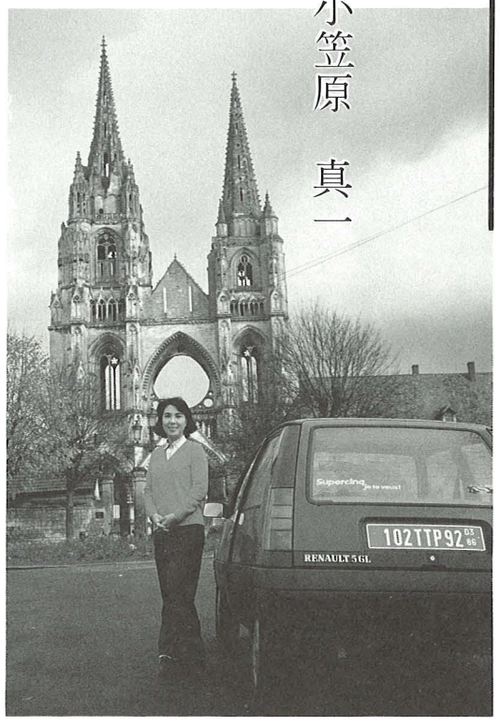
夫婦でフランスを旅するために、新車を一台買った。日本で暮らしている時は、〈車検付き、一切込みで二十万！〉なんていうセコハンばかりを乗っていたわたしたちだったけれど、そう決めたのは、その方が、レンタカーや鉄道よりも安くて便利だとわかったからである。

そんなうまい話があるのか。実はある。フランス政府観光局が送ってくれる資料にも載っているのだけど、〈ＴＴ車〉というのがそれで、わたしたち外国人は、免税で車を買い、通常半年以内の間、自由にその車に乗ることができる。この場合、車は契約期間が終われば返すのだけれど、結局、買い戻してもらうのと同じような理屈だから、車を利用するわたしたちが支払う金額は、その分、グンと安くなる。フランス一周一万キロ。一日二〇〇キロとしても五十日ぐらいは見込まなければ駄目で、それを実行しようとすれば、レンタカーは高くつき過ぎるし、鉄道ではいささか不便。両者の折衷も考えられなくもないが、連絡や確認など、面倒が増えるばかりであまりメリットがない。だとすれば、車を買う。小型車一台で、日本から手続きをして、保険その他の経費を含めて、二十五万円支払ってお釣りがきた。一人旅には少しもったいないかもしれないが、二人以上なら、十分納得のいく金額である。ちなみに、〈ＴＴ車〉は、赤地に白い文字のプレートをつけている。赤ナンバーの、ワインレッドのルノー・シュペール・5（サンク）、それがわたしたちの車である。

起点であるパリを発って、五十キロばかり行ったところにあるモーという町で道を間違えた。どうしてかは分からない。人口五万足らずの小さな町。その町を通過しようとして、町の中心部を迂回するようになっている国道を走っていて、なぜか道を間違えた。その後、何度か、同じようになんでもないようなところで道を間違えたり、また間違えそうになった。どうやら、分岐点にしばしばでてくる矢羽型の道標の読み方が、わたしたちがそうだと感じているものと、少し違っているらしい。要するに、ここでは、矢羽は、〈一番近いこれ〉という意味であって、それ以外のどんな方位も位置関係も含まない。そう理解することで、以後、道路の選択のミスはなくなった。

ここではもちろん、左ハンドル車で右側を走るわけだが、妻もわたしも日本での運転歴が二十年近くあったせいか、初めてマニュアル車で右側通行をすることになっても、「ちょっとバランスが違うかな？」ぐらいのもので、それが負担になるというようなことは別になく、割に早く慣れて、どうというほどのことは何も起きなかった。

ただ、いくつかのいまいましい例外がある。ウインカーとワイパーレバー。外車族でないわたしたちには、この左右の違いはすぐには克服できなかった。習慣とは恐ろしい。たとえば、右に曲がろうとして、そう思った瞬間、無意識に右手がレバーを押し下げている。すると、とたんにワイパーが暴れ出し、いけないと思って再びレバーを押さえると、今度はガラスに水が吹きかかる。危険は



戦禍が残るソワソンの教会前にて
妻とわたしたちの車ルノー・シュペール・5

ないのだけれども、しかし、あまり格好はよろしくない。

もう一つは、信号機の取り付け位置。車が利用する信号機は、日本でもおなじみの道路にはりだした大きなものと、停車した車が利用する柱状の小型のものとがあるのだけれど、いずれも、交差点や横断歩道の手前に取り付けられていて、ドライバーが信号の見える位置を確保しようとするならば、確実に、交差点や横断歩道から遠ざかって止めなければならない。いかにも簡単そうだが、実は、案外これがむずかしい。信号の赤を確認した後、日本なら、目を路面に移し、無意識のうちにブレーキを加減して、停止線ぎりぎりまで車を追い込んでゆくのだけれど、ここでは、そんなことをすればたいへんである。車は、たちまち信号の見えない位置まで進んでいて、「えーい、仕方がない。それなら横の信号で」と思っても、当然取りつけ位置が違うのだから見えるわけもなく、結局、後退するしかない。だが、後続車があればそれもならず、ついには首をねじ曲げて、後ろを振り返り、その車が青信号をライトで教えてくれるのを、恥を忍んで待つしかない。ああ、それにしても、初めのうちは、何度しくじったことだろう。この国では、クラクションは、滅多なことでは鳴らさない。石畳の道路が文化なら、われわれ日本人が首をねじ曲げる羽目になる、この交差点も、やはり、ひとつの文化である。

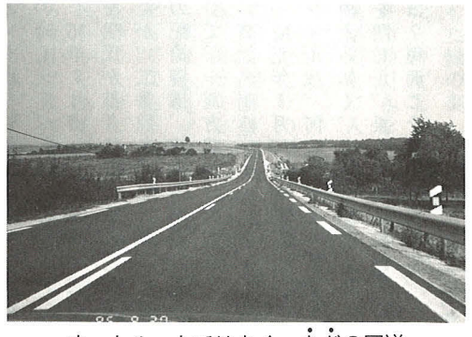
こんなのが、初め四～五日続いた。とはいえ、運転のしはじめに集中して起こった失敗の多くは、左右の違いというよりは、むしろ、矢羽型の道標にみるような、ちょっとした感覚のずれや、やり方の違いによって引き起こされたものである。

さて、フランスの道を走って、もっとも印象深い事柄はといえば、やはり、走る速度である。速い。町や集落のなかとか、特に曲がりくねった谷間や山道などを別にすれば、通常八十～九十キロ。車線が確保されているバリッとした道路なら、たいてい、一〇〇キロ以上で走らせる。オートルートに至っては速度制限一三〇キロである。

路面がいい。見通しがきく。そのうえ交通量が少ない。これだけでも車はかなり走りやすくなると思うのだけれど、加えて、人家や交差点が極端に少ない。極端にと言うのは、無論日本と比較してのことである。行けども行けども道路ばたには家々が立ち並び、町や集落が数珠つなぎの日本。しかし、ここでは事情が一変する。わたしたちは、人家をかき分けながら進むのではなく、たいていは、緩やかな起伏のある牧草地や畑、そして、森や林を突っ切って走る。走るうち、時おり集落が現われて、その時、きちんとスピードを緩めればよい。面積が日本の一・五倍、人口が半分強。しかも、国土のほとんどすべてが切り開かれている国、フランス。道路横断に失敗し、無残な姿をさらす針モグラにはほんとうに気の毒なことだけど、「なるほど、車は、ものを速く運ぶ道具だったのか！」と実感するのはこの時である。右側通行とはいっても、フランスは、わたしたちにとって、案外走りやすい国である。

（フランス料理店経営）

右、山を縫って国鉄の線路がはしる
上、マルセイユの街中
はるか前方に横断歩道が見える



オートルートではなく、ただの国道

高知の映画文化を探る——

「名画座」の周辺

星加敏文

昭和10年頃——愛媛県立西条中学校当時、先輩の声や新聞広告から高知の映画封切りは早いことを知り、羨望を感じた想い出。戦前「キネマ旬報」の購読者が多かったとか、「スター」誌の懸賞当選者に土佐人が少なくなかった以上に、高知に移り住んで実際に映画好きの土壌であることを肌で感じ、「映画独立県」だと自慢してきた。大正14年11月発足の旧制高知高校映研主催の欧州映画上映会の大ヒットは語り継がれた歴史の一コマ。続けて開催される上映会などは、大衆芸術の認識プラス映画鑑賞眼のレベルアップ——良い映画の尺度感覚育成に役立ったと思う。

明治29年11月、映画の原形が神戸に上陸、常設館第一号が浅草に開館したのが36年10月。「目玉の松チャン」こと尾上松之助登場の42年頃から各地に映画館が急増したようだ。地方では芝居小屋での映画興行が普通だった大正4年頃、常設館が続々誕生したのも、支持する層が厚かった証しだろう。

働く者たちの唯一の娯楽が映画——大正末期の大山館の惹句に「労働党の慰安所」とあるのが納得できる。大正7年8月、全国約500館の常設館の中に鳳館の名が見える。陸の狐島だった高知では、ファッションなどの情報を映画から学んだのであろう。平成元年1月某日、高知放送放映の「昭和史」12年頃の風俗がほとんど着物姿であることは、私たち県外生まれには驚きである。が、大正——昭和初期の映画チラシ広告やプログラム（無料で各館独自のものを配布）の言葉の端々に新しいものへの熱気が感じ取れる。

戦後、米画独占配給機構CMPE解散の昭和26年より後、封切本数・映画館の急増に伴い、作品中ヒット作や名作を、洋画中心に低料金で観せる二番館が姿を見せ始める。31年当初、全国5600館の内「名画」命名の二番館が、東京460館中18館、神奈川・福岡が各5館、他2館・1館の県が続き、ゼロの県が28。129館中ゼロの愛媛に比べ、高知では名画劇場（高橋清晃氏経営）の活字が目に。大阪府下328館のうち唯一の館も高知出身の中平孟氏とある。

名劇は昭和26年から32年12月焼失までに、「商船テナシチー」「嘆きのテレーズ」「田園交響楽」「愛情物語」「地上より永遠に」等たくさんの名画を二番上映している。また28年12月開館の中劇（同高橋氏）も「エデンの東」「理由なき反抗」で大入り満員、「ピクニック」「愛の泉」「上流社会」「風と共に去りぬ」「死刑台のエレベーター」などなど名作を続々上映、後年ピンク映画館となり、60年5月10日閉館。芝居小屋として有名だった朝日座（劇場）も戦後、大友柳太郎の実演や「バラ色の人世」「雪夫人絵図」などを上映後、33年3月から佐々木淳男氏経営のピンク映画館となり62年3月17日「唯一のカーボン光源映写機」のまま閉館。大正末期からの高知別天地・千歳館は東亜・マキノ・新興・大都作品を封切り、唯一戦災を免がれた映画館として、終戦直後洋画も上映。その後、松竹座と同時に封切りで「安城家の舞踊会」など。「愛染かつら」では大入りで行列ができたと語り草。24年頃から二番館として無声映画「母」なども。

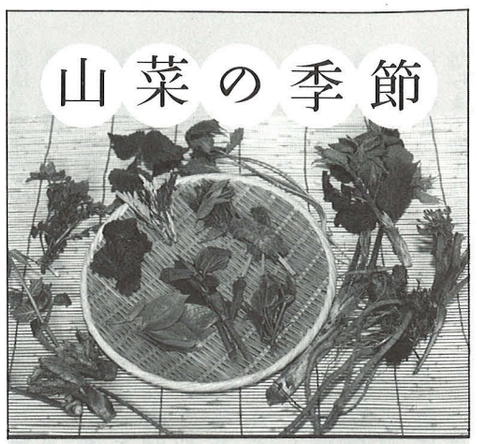
故藤原英記氏が同館を借用してちとせ名画座として42年発足、「パリのめぐり逢い」などを上映していた。当初から協力を求められたのが縁の私は、高知スーパー本部の企画宣伝担当だった。キネ旬48年8月下旬号に拙文「われらの映画館・高知名画座」で活字化。朝日新聞中治記者「いごっそう人物」取材、そして49年6月、私の根回しで「恋のエチュード」試写に白井佳夫・和田誠両氏を招き、全国ファンを驚かした。その後「女性週間」「雷蔵マラソン」「武蔵マラソン」などなど影の協力で成功させる。当初の早期試写会に私ほか一人の時も……。

55年7月惜しくも急逝。父の遺志を勲氏が継ぎ名画上映の実績を残す。だが、二番館名画座の原点と封切館の配給機構、諸設備問題の谷間にあって、一地方館が時の流れに……。

高知名画座20年のラストショー、平成元年1月16日が満員とは……ヤンヌル哉。何時の間にか蠟燭の灯の消える如く、中劇も朝劇も淋しく幕を閉じた。果して高知映画文化の灯は？復興こそ必ずと信じて。

（映画研究家）

山菜の季節



松崎淳子

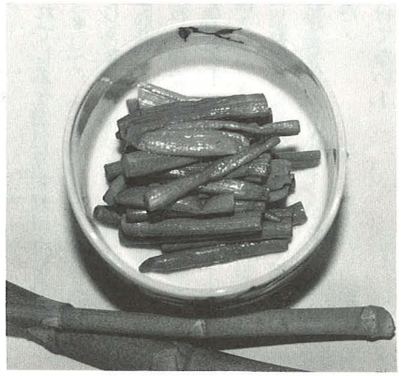
高知の春は、東と西の岬から足早にやって来る。日曜市にも蕗のとう、葉わさび、水田ぜりが野山の春を告げ、三寒四温のうちに彼岸が来る。春の墓参りは摘み草しながらの帰り道が楽しみで、筆山の小径に結構多いあざみやさるとりいばらの芽立ち、よめな、湿地のような木蔭の三つ葉などを摘む。一握りずつの山菜ながら、あざみは茹でて酢味噌和え、三つ葉やいばらの芽は天ぷら、味噌汁に浮かしたのびると……夕食は酒もひとしお旨いらしく、夫は大仰に褒めそやす。私も心の安らぎを感じる。園芸野菜に飽きてしまった今、人間らしい食べものを見つけた、失っていた贅を取り戻したという実感がある。日頃は無国籍で季節感の乏しい食卓にも、風土の息吹きの通う季節が訪れた。身近に自然を控えた三十万都市の良さであろう。

山菜には灰分、ことにカリウムが多く、アルカロイドや蓚酸など不味成分も多いから茹でてあくを抜くが、程よく残るあく成分は春先の体調を鼓舞する効果があるという。

蕗、筍、わらび、ぜんまい、のびる、つわ、いたどり、うど、たら、よめな、ぎぼし、こごみ、たんぽぽ、よもぎ、つくし、わさび……酢味噌和えなら大ていはOK。ごま和え、白和えはもちろん。天ぷらはえぐ味や酸味を隠す魔術師だが少量がよい。

さて、何といっても高知独特はいたどりだろう。煮て食べたり、塩蔵までするのは四国山地の南側だけ。蓚酸などの有機酸を除くのと、歯ごたえを残す加熱のコツさえ覚えたら、山深くわけて採りに行く気になる。一番はじめに伸びた茎を放置すると丈余の竿となり、なるほど、「虎杖（いたどり）」と書くのは正しいと合点する。一番を摘むと側芽が伸び、三番までは採れるが肉は次第にうすくなる。

40～45度ぐらいの湯に二分ぐらい浸すと皮が剝けやすい。これを熱湯にほんの四～五秒通して水にとるが、この加減がコツで、短過ぎると酸味を抜くのに時間がかかり、長過ぎると歯ごたえをなくして失格になる。一昼夜で酸味がとれ黄土色になる。塩蔵品は水さらしで酸と塩気がとれ、生よりも短時間ですむ。



煮方の要点は、加熱を短くすること。濃いめのだしに調味して、沸いたらいたどりを入れ、ひと沸きで火を止めて蓋をしたまま味を含める。味が薄いからと煮込みは禁物。いたどりを取り出して調味を改め、その汁を冷まして漬け込む。この頃、山の人たちは山菜には油が合うといって、油炒めして調味し、だしを少し入れて火を止める方法が多くなっているようだ。歯ごたえもよく、味にこくがでてなかなかいける。

いたどりの酸味と、さっと火を通した緑の美しさを生かしたものにいたどりずしがある。筋の細いいたどりの湯引きを剝皮し5～6㎜に刻み、混ぜずしに入れる。水さらしはしない。

いたどりの塩漬けは剝皮後5％塩で三～四日下漬けしてから本漬けする。歯切れをよくするために荒塩にニガリを混ぜ、強い塩、重い重石、そして変色防止のために蓋に鉄釘のないことなどを確かめる。塩に糠やおからを混ぜてもおいしい。漬けて一ヵ月で食べ始め、翌年シーズンまで食べる。

街のくらしではとても塩漬けはできないが、ホームフリージングなら手軽でよい。皮を剝いでパラパラと塩をふり三十分もするとドリップがかなり出ている。これを軽く絞って、一回使う量ずつラップで包み冷凍する。塩漬けよりも色がきれいで、水に放って解凍と塩抜きを同時にするのも割と短時間でよい。半年ぐらいは結構歯ごたえもよい。それを過ぎると若い茎はよいが、硬い茎は冷凍障害がひどくて筋ばってくる。

私は観光客に上手に煮たいたどりを食べさせる店があってほしいといつも思う。山深く、多雨で、温暖で、山菜の多い土佐の味の代表選手だと思っているから。

（高知女子大学家政学部教授）

素顔の子どもたち♥第2回

書く、書き綴る、描く

門田雅人

「卒業式まであと○日」と掲示係の朋彦君と典之君が毎日、背面黒板に日数を書き直してくれている。その数字は、「一月が行き、二月も逃げ、三月は去る」の言葉通りに驚くべき速さで減っていく。

今日は、卒業写真の服装について子どもたちが学級会を持った。その結果、例年中学校の制服を着て写真撮影をしていたらしいのに、あっさり「今年の私達は私服」と決めてしまった。私は少し狼狽している。「小学校の卒業なのだから」「制服は中学・高校と十分着るから」という考え方に全く異存はないのだけれど……。

同僚の研究授業に参加していた間の話し合いだったのだが、多分「例年通り」に決まると予想していたのである。子どもと親が決定すべきことなのだから私見をはさまないで任せておこうと考えていたのに、予想外の展開に親の意向を気にしている自分が少し情けない。子どもたちは、教師の思惑なんか乗り越えて、ぐんぐんと成長していくので圧倒されてしまう。

＊　＊

『私はおばさんじゃない』　柴圭

「圭さんはおばさんじゃない」
先生にとつ然言われた
なんでおばさんながよ！
そりゃあ
体は大っきいし　ませちょうかもしれんけど……
「圭さんは顔もおばさんやもん」
またまた言われた　顔もおばさんやもん」
私はそんなにふけてない！
そりゃあ
しんどいとかつかれたとか言うけんど……
ちょっと　ひどすぎるぞ
顔では笑っているけれど
先生！
私はおばさんじゃありません
圭さんは、教師の私を材料にして次々と詩を日記帳に書いて来た。詩の形はとっているが、言葉の羅列に止まっている。しかし、「詩を書くのが苦手だったが、楽しくなってきた」というのだからうれしい。それに、だんだんと詩の感じがつかめてきたように思う。

四月から一人二冊の交換日記を毎日続けてきた。今年の六年生は、感じたことをズバリと書いてくれる。私にとって、そのことが赤ペンを書き入れる大きな励みになり、「今日はどんなことを書いているかな」とワクワクする。

私は、高学年を担任した時、「書くこと、書き綴ることを日常化して空気を吸うのと同じようにさせたい」と願って実践を続けてきた。しかし多くの場合、痩せた畑を耕す農夫のような空しい努力を必要とした。少なくても一ヵ月間、大体一学期間は、「ほとんど白紙のノート」や「数行しか書かれていない日記」「長くても内容の乏しい文章」との格闘を覚悟してきた。それが、津野川小では四月当初から赤ペンを書き入れるのが楽しかった。先輩たちの努力の結晶として、〝書き綴る〟伝統が息づいている。

私は、九人の六年生を三班に分けている。三人ずつ、毎日の「帰りの会」に日記を読んでもらうためだ。子どもたちは、自分の日記を学級の仲間に公開する。そして、「先生の赤ペンを読みます」と自分の日記に付けられた教師の文章も読んでくれるのである。

家庭学習帳と名づけた方眼ノートも、二冊が教師と子どもたちの間を往復している。漢字、計算、朗読などを二十分、その日の復習や予習、教師からの課題などのほとんどをこのノートに書くことで学習をする。そして、しめくくりにどんな勉強をしたかと合計時間を書くことにしている。

家庭学習帳は、子ども自身の学習記録と言える。私は学習内容や書き方の印象を中心に、評価し励ますことが仕事だ。手書きの評定マークをつけてやるのだが、こどもはそれに一喜一憂している。勿論、やり方が分からなかったり不十分な内容には援助をするが、いちいちの点検はしない。漢字の見直しや計算ドリルの答え合わせなどは子どもが自分でやることを基本にしている。

一月中に、朋彦君が七冊、美佳・千苗・尚美さんが十一冊、多重さんが十四冊目を終了した。毎日、一時間半以上を約束の時間としている。子どもたちは、この家庭学習帳の頑張りを、それこそ盆も正月も毎日続けてきた。そして、その証拠が教室の後ろに「家庭学習帳を綴じた塊」として残っているのである。（日曜日は遊びと家の仕事の日）

＊　＊

書く、書き綴る、描くことなどを誠実に取り組んできた自信を、多恵さんが日記に書いている。

『母の言った一言』　今井多重

「ばいばい」圭ちゃんの家から母の車で帰ります。坂本を通っている時、「このごろみんながんばりよるね」と母が言いました。私もそうだと思いました。二学期はみんな一生けん命がんばっていたと思います。

典之君が高跳びで優勝したり、私が平泳ぎで郡の十傑に入ったり、図画で圭ちゃんが最優秀特選で全国の十点に入ったり、三学期には小砂丘賞に感想文、他にもたくさんの人たちが……がんばっている証拠だと思います。

近頃でいうと、小砂丘賞でさっちゃんが最優秀になったことです。みんな同じようにがんばりました。先生も言ってたように、さっちゃんだけがずばぬけて作文が上手というわけじゃないと思います。みんな上手です。その中の代表としてさっちゃんの作文が選ばれたのです。すごいことだと思います。

——中略——

母が「このごろみんながんばりよるね」と一言言っただけで、私は車の中でこんなことを考えながら帰りました。

＊　＊

子どもたちは今、卒業まで残り少なくなった中で真剣に卒業論文「成長の記録」に取り組んでいる。版画「十二歳の自画像」を刻んでいる。「成長の記録」は原稿用紙三十枚以上という約束で、自分の過去・現在・未来を書き綴る仕事、「十二歳の自画像」も自分を見つめて描きする仕事だ。自分の幼かったころのことを取材して、新しい発見があるらしい。父母の苦労を初めて実感している様子もある。そうして、十二歳の自分を見つめている。

（西土佐村立津野川小学校教諭）

出版物のご案内

土佐の芸能　高木啓夫著
定価四八〇〇円
現在、高知県下に伝わる伝統芸能を網羅。それぞれを神楽、獅子舞など十五項目に分類、詳説を施した芸能百科。

中山高陽　清水孝之著
定価三八〇〇円
藩政期、土佐の生んだ江戸南画の祖・中山高陽の全容を明らかにした労作。あわせて書翰集、資料集、年譜を収載。

高知県方言辞典　土居重俊・浜田数義著
定価六〇〇〇円
日常何気無く使っている言葉から古語に至る土佐方言を採録、意味と成り立ちを解明した土佐言葉の集大成。

おらんくことばてんこもり　定価八〇〇円
方言辞典に採録した方言約一万四千語が一目で分かる、B全両面ポスター。

土佐自由民権資料集　外崎光広編
定価三〇〇〇円
土佐自由民権の基本的資料を事件別に分類・収録し、原資料により各々の事件の実態が把握できるように編集した資料集。原典により民権を知ることができる。

高知の明日を考える **高知レポート** 豊富な資料と論考

●高知レポート4
土佐の自由民権運動
外崎光広著
A5判 156頁 定価1000円
従来の自由民権研究に一石を投じる画期的な著作。土佐人必読の一冊。

●高知レポート2
いかにすれば都市の河川はよみがえるか
今井嘉彦著
A5判 108頁 定価1000円
病んでいる都市河川を回復させるための大胆な提言を、具体的な事例と資料をもとに述べた書。

●高知レポート1
明日を創る
大谷英二著
A5判 124頁 定価1000円
高知の〈まちづくり〉に関する17の計画書、提言を要約・解説した資料集。

お買い求めは、市内各書店または事業団まで。

ふるさとへの思いを

川村　千枝子

人生五十年を生きた昭和が終わり、平成元年となりました。

私が生まれたのが昭和十三年でしたから、戦中・戦後の苦しい、物の不自由な幼少時代でした。勤勉・努力・辛抱が当時の躾の根本でありました。

「やまびこ学校」や「綴方教室」が盛んで、文章を書くことの教育を受けました。

『荷車の歌』の本を読んで私も書いてみたいという強い印象を受けたことでした。

成人式の写真を見ると皆質素な洋服で、これが私の青春時代であったと目頭が熱くなります。

嫁いだ村（土佐町）に日本列島改造論旋風で、四国の水瓶早明浦ダムが建設される事になりました。そこは六百数十年に及ぶ古い歴史が生き続いている、四国山脈の中の集落でした。

ダムで水没すれば湖底となり、昔の語り伝えが失われる。子孫に記録を残しておかなければと思い立ち、『ふるさと早明浦』という本にまとめました。今では早明浦ダムは「四国のいのち」として水資源の多目的利用の役目を果して、下流域の発展がなされました。

高度経済成長の時代とそれに続く衰退、嶺北地方の変貌は著しく、大きな国のプロジェクトが終わった後には、過疎と荒れた農林業が取り残されました。時代の影響が最も顕著に表われたのは教育の現場においてでした。

昭和二十三年六月に本山町に嶺北高等学校が新設され、山村でも勉学を続ける子弟が増えました。そうした中で、三十五年にはラグビー部ができ、四十五年の県大会には初優勝を飾り、以後五十五年まで県内公式戦八十四連勝という輝かしい記録を打ち立てました。郷土の人々からは、「地域のほこり」と声援を受けておりました。

しかし過疎による生徒減少のため、ラグビー部の母体となっていた農林科募集停止が決まり、五十八年にはラグビー部も消滅してしまいました。盛んだった頃の嶺北ラグビー部にスポットを当てながら、嶺北地方がどのように変貌してしまったのかを記したのが『嶺北・青春をラグビーにかけて』です。

ラグビーを指導したのが畜産の先生でしたので、実践を農業に生かした生徒が〝土佐の赤牛〟〝土佐の黒牛〟を育て、山間地の基盤産業となりました。

激動の昭和を生き、故郷の姿を見つめてきて、人の心も変わった事を感じます。

木は植林して五十年育てなければ切って売る事ができない、買い手がないかも知れない。けれども緑の国土を守り、老齢化の村を支えているのがそこに残った人々なのです。喉元過ぎれば熱さ忘れて早明浦ダムの果たす役割を忘れないでほしい、そんなアピールもあって『四国のいのち』という題名の本を書きました。

この嶺北にも戦国武将が国盗合戦をした歴史があり、歴史も観光資源になるのではないだろうかと草深い山村の物語を掘り起こして書いた「本山城物語」、本川神楽とチョンガリの伝承をもとに、藩政時代土佐の森林資源を守り育てた山人の生き様を記した「吉野川源流」の二編から成っています。

瀬戸大橋が架かり、四国横断自動車道が開通して四国は島国ではなくなりました。

ふるさとがこれからどのように変わって行くか知れませんが、人口の流出の歯止めは見当りません。でも、嶺北人は田舎を守り、水源を守りながら生き続けることでしょう。

私の本職は土木施工図の製図や技術管理で、土建業の事務員といったところです。これは早明浦ダムの建設当時に習得しました。

公共土木工事だけが僻地に生きる人々の生活の糧となっているのが現状で、「親方日の丸」でも休祭日にかかわりなく仕事に追われ、時として毎日休日がやってきます。

経済大国日本において、時勢について行ける者と、影の部分に置かれ取り残される者との間に立ち、思いのたけをペンに託すのが私の書く事への楽しみです。

平成元年になり、平に成ると信じ、新しい人生五十年へのスタートです。

（地元ライター）

私の風景

曽我　義雄

御畳瀬

午前2、3時ごろ出港して夜の10時ごろ帰港する底引き網漁船が水揚げしてきた沖うるめやにろぎ等を、道端で天日干しにして商う干物屋。可愛い女の子が母親に付き添って手伝っている様子が、ほほえましく感じられる。

それぞれの仕事

インテリアコーディネーター

北岡　万智子

従来、住まいづくりは大工さん、内装屋さん、電気屋さん、家具屋さん等、それぞれのパート別専門家とユーザー（消費者）が直接関わる事から完成されてきました。しかしその結果、生活行動に関わる全てのインテリア製品がバラバラに選択され、アンバランスな組み合わせがしばしば見られるような結果となったのです。こういった問題点を解決し、それぞれのユーザーの新しい住まいへの欲求や夢、好みなどを引き出し、作り上げていく、それが私達インテリアコーディネーターの役割です。

私は、昨年まで東京で俗にいう億ションのリフォームコーディネートを手がけ、帰郷した現在、コーディネーターとして大和ハウス工業㈱に勤めています。

住まいづくりに対するユーザーの不安要素の項目を洗い出してみると①どんな住まいが出来るかというイメージを把握出来ない　②デザインセンス　③自分の要望を的確にきいてくれたかどうか　以上の三点が最も多いように思われます。私とユーザーとの関わりは、基本設計がほぼ決まった時点からスタートします。

まず、営業、設計の各担当者からユーザーの家族構成、年齢、収入の程度、家長の人生観、家族の生活状況、交友関係、そして保有家財などの情報を収集し、それをもとに①の不安感を解決し、視覚的により分かりやすくするため、平面図に保有家財（あるいは新しく購入予定の家財）の縮尺図やそれに関連して想像される人物の行動図を描き、彩色します。更に、カーテン、ライトのコーディネートを部屋単位でプレゼンテーションさせていただきます。そして、着工前打ち合わせの段階で具体的なイメージを直接伺いながら、床材、壁装材、天井材と、家具、照明、カーテンなどを同時に選定していきます。この事により②、③の不安要素を徐々に解決して、バランスのとれた生活空間が生まれて来る訳です。

都会に住む人達に比べて家を持てる可能性の大きい私達は幸せだと思います。とはいえ人生で最も高価な買い物なのですから、構想段階から私達インテリアコーディネーターを大いに利用していただきたいと考えております。

川柳帆傘

伝統を継いで四十年

岡村　嵐舟

月刊川柳誌「帆傘」の復刊第一号を出したのは、昭和二十四年七月であった。もちろんまだ連合国軍の占領下にあり、衣料品や味噌・醤油・砂糖などの生活必需品も、戦時中の配給統制がまだ続いていて、敗戦の影響は、われわれの日常生活の上にきびしくのしかかっていた。

そんな食うや食わずの日々を送る中で、戦前から戦中にかけて十三年の歴史を持ち、全国的にも名を知られていた「帆傘」を復刊しようという声が、「帆傘」の名を慕う生き残りの川柳人たちの間に急速に高まり、大きな流れとなって、一気に具体化へと進んだ。

それから風雪四十年。時には経営難のために、廃刊寸前に立ち至ったことも幾たび。また表紙共わずか四頁という、川柳誌とは名ばかりのものを出して、辛うじて月刊を守った苦しい時代もあったが、同人の一致協力でこれを乗り切り、一回の休刊も無く、この二月号で四百七十六号に達した。

現在、「帆傘」の同人は四十三名。高知・伊野・中村・室戸など、各地の実力豊かな川柳人を網羅し、永い伝統を守って運営に当たり、昭和六十年には、地域文化の振興に尽くした団体として、高知市長から表彰を受けた。

来たる五月には、大阪や四国各地からも著名川柳人を選者や講師に招き、高新文化ホールで、復刊四十周年記念行事を盛大に催す予定で、その準備も着々と進んでいる。

（川柳帆傘幹事長）

連絡先〒780高知市新屋敷二―八―一三

七二―三三四三（岡村）

高知ペンクラブ

文学の豊かさめざして

猪野　睦

一九七一年、県下の文学関係者が集まり、高知の文学土壌を豊かなものにし、高い水準の文学と文化を生み出していこうという主旨から、高知ペンクラブが結成された。世界平和に寄与する国際PENクラブのチャーター（憲章）を踏まえて、日々の営みと文学活動を展開しようという宣言を掲げての出発だった。

結成以降、十八年の間にいくつかの事業が定着した。総合文芸展の開催、文学散歩による県内文学事蹟の発掘と研究、『高知文芸年鑑』の刊行、各ジャンルの交流、高知ペンクラブ賞による在野の文学功労者の顕彰などである。

中でも『高知文芸年鑑』の刊行は、一九七四年版以降八八年版まで、十五年間の高知の文学動向を詳細に記録してきた。個々の単行本、文芸誌などの紹介は千冊を超えている。地味な刊行であるが、十五年経ってみると資料的価値も高くなってきている。

高知ペンクラブ賞は一九八三年に設定した。県下で、長年、在野にあって文学の発展に功績の大きかった人を顕彰すべきという主旨から生まれた。戦後四十年をこえる歳月の中で、それぞれの文学ジャンルの基礎を築き上げてきた人に贈る賞である。これまで九氏に贈られた。

現在会員は、七ジャンル合わせて三百余名である。高知ペンクラブは、高知の文学を豊かにする力のひとりに加わろうという人は誰でも自由に参加できる。

（高知ペンクラブ事務局長）

連絡先　二四―六一〇〇

（中央公民館内）

図書館問題研究会

くらしの中に図書館を

尾﨑　三郎

図書館問題研究会（略称図問研）は、図書館を住民のものとするためにという呼びかけに基づいて、一九五五年全国の公共図書館の職員を中心にして結成されて以来、住民の暮らしに役立つ、住民の学習権を保障する図書館づくりをめざして活動している個人加盟の団体です。全国に二十八支部があり、会員は約千七百名。高知支部の結成は一九六八年で、現在の会員は県下に二十二名です。

公共図書館を発展させるための課題として、未設置町村での図書館づくり、司書職制度の実現、図書館組織網の確立などがあり、さらに、緊急の課題として、国民の土曜休日の増加に対応しての図書館の開館時間の問題や行革における図書館の委託問題などが重要となっています。

図書館をとりまく状況は決して明るくありませんが、高知支部でも住民の学習権を保障し、資料提供を核としたさまざまな図書館サービスの内容を豊かにしていくために、学習活動に取り組んでいます。中央から発行される月刊誌「みんなの図書館」による学習会や、県下の町立図書館の振興を図るため、町立図書館の実態調査などを行っており、「高知県における小図書館の実態調査報告」と「伊野町立図書館調査報告書」を作成し、県下の公共図書館に配布しました。

今年の支部の課題は、県下の町立図書館の一層の充実に役立つ学習活動と新会員を増やすことです。

（図問研高知支部長）

連絡先　七五―九〇一八

（高知市民図書館）

高知茶道和敬会

和敬会と共に

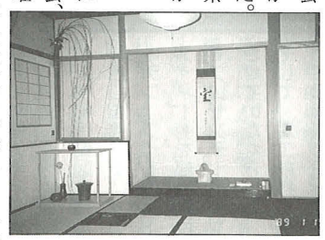
町田　みつ

新春を迎え年号も改まった平成元年一月二十九日、恒例となっている和敬会の新年会を自粛して、互礼会を催しました。

高知和敬会は、昭和三十五年五月十七日に創立されました。戦後の生活に潤いを願う気運が県下の茶人間におこり、流儀の異なった六流（表千家・裏千家・江戸千家不白・表千家不白・日本茶道・石州）が一つとなって、高知市中央公民館育成団体となったのです。

中央公民館は昭和二十六年に開館しましたが、当時の館は木造二階建てで一階は日本間でしたので、現在の建物にかわるまで、茶会もここで開かれていました。

和敬会の茶会は、六流が当番制に従って催します。新年会の他に春・秋の茶会、九月末の日曜日に開かれる茶心塔茶会などがあります。茶心塔茶会というのは、慶雲庵の庭に建立している碑「茶心塔」の前で茶礼を行い、茶祖千利休や高知県下の先人の遺徳を偲び、茶道の真髄「和敬清寂」を体得するものです。



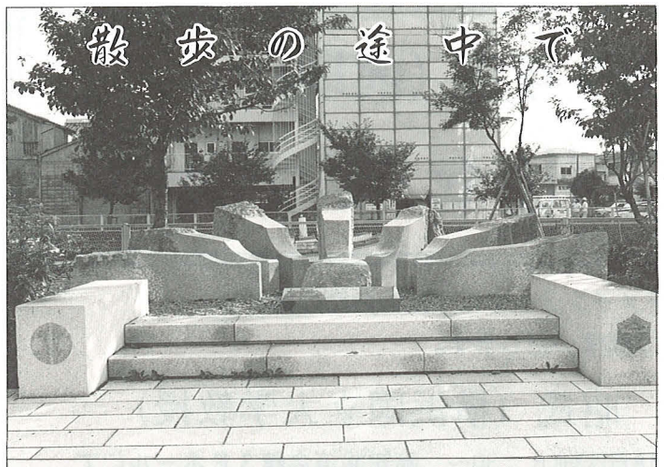
茶会の他に、年末には「土佐希望の家」への寄附を続けています。また今年は市制百周年を記念して、六月三日に京都・東福寺管長を招いての講演会も予定しています。

和敬会も三十年目を迎え、創立時の先生方は大方亡くなりましたが、新しい方々が新しい力となって六流の友愛の輪を広げて高知の茶道を盛り上げていくとともに、地域社会への貢献にも努めていきたいと考えております。

（高知茶道和敬会会長）

連絡先　二四―六一〇〇

（中央公民館内）



農人町の堀川沿いにある「北光社移民団出航の地」記念のモニュメントである。訪れたことのある方は、放射線上に広がる石群がすぐに頭に浮かぶであろうが、階段両側の石に高知市と北見市の市章が彫られているのは見落しがち。92年前（1897年）、北海道の広大な原野に新天地を開くべくここから舟出していった坂本直寛、沢村楠弥はじめ移民団の人々の熱い思いが伝わってくる。

風伯

無用をいう

まず、男の人生双六から。

『生まれた、偶然。小学卒、当然。高校卒、平然。大学卒、憮然。四十歳、唖然。五十歳、愕然。六十歳、慄然。』

ヘンな勘ぐりはご無用。あなたのことを申し上げているつもり、毛頭ございませぬ。あとで人生のエキス飲まして進ぜますゆえ、気分なおしてお読みくだされ。されど、読後、憮然、唖然となさらぬように。

――ここから、ガラリ文体を変えて

けさ木立ちの道を散歩したので、その余韻が「散木」の二字に結びついた。「散木」とは無用の木を意味する。たとえば栴檀（せんだん）の木。『無用の木、転じて無用の人をいう』と辞書にある。中国では古来、栴檀の木を神聖な木として崇めた。

雅号の下に「散人」とつけるのは、気取り屋だろう。みずから、「私ハ無用ノ人デス」と押しつけがましい振る舞いをする必要はないと思うが――。

中国の哲学書「荘子」に〝無用之用〟ということばがある。平生は無用の存在でも、有事に際して絶大な効用を果たす。すなわち、有効的な無償の行為者と、私は理解する。

〝無用之用〟を心がけて恬淡（てんたん）と生きた大野武夫さんに、その典型をみる。

ならば、千人に、千の人生あり。

さあ、あなたなら、どんな人生を選択します？

（鯨）

1989年度（前期）
文化セミナー

『自然』をメインテーマに下記の講師の方々をお招きして開催いたします。

▶宮脇　昭氏（横浜国立大学教授）

4月18日㈫p.m.6：30～　高知共済会館3Fホールにて

・都市における植生と日本の植物の特徴

▶岩本久則氏（漫画家）

5月中旬（予定）

・鳥と人との関わり、人間と動物のための環境づくり

▶池田武邦氏（㈱日本設計事務所社長）

6月（予定）

・自然保護とリゾート開発

▶香原志勢氏（立教大学教授）

6月（予定）

・人の顔、表情について

申し込み・お問い合わせ

高知市文化振興事業団まで。お電話またはお葉書で。

〒780 高知市本町5丁目2番3号　TEL（0888）73－4365

第5回高知の映像コンテスト入選作品発表・展示

3月10日㈮～15日㈬　とでん西武6階催事場にて

●なお、表彰式は最終日15日㈬午前十時から同会場にて予定しています。

『文化高知』賛助会員募集!!

●会費　年会費2,000円（一括前納・申し込みより一年間有効）

●特典　①「文化高知」の送付（年6回）　②事業団主催事業の入場券や出版物一割引（一部例外あり）　③事業や発行物の案内。

●申し込み　①郵便振替　②現金書留　③事業団へ直接……いずれの方法でも結構です。

あなたのお手元にお届けします。

財団法人　高知市文化振興事業団
〒780 高知市本町五丁目二番三号
TEL（〇八八八）㉓四三六五
郵便振替　徳島8－14869